

貴人の憂鬱

-源実朝の和歌に寄せて-

すみくらまりこ

—梅が香を夢の枕にさそひきてさむる待ちける
春の山風—

夢の枕

宿命を
負わせて
継がせて
ともに滅ぶ
梅が香のひと

—木のもとに宿りをすれば片しきの我が衣手に
花はちりつつ—

宿り

はなあやめ

紫まとふ

女あり

襟を直し

振り向く一瞬

—我が心いかにせよとか山吹のうつろふ花に嵐
たつらむ—

沈思

滴すら
水打つ力
水琴窟
言葉滴る
想いの甕に

—散りのこる岸の山吹春ふかみこの一枝をあは
れといはなむ—

ぼたんゆり

ぼたんゆり

嵐近づく

夕暮れは

蜂を包みて

朝まで匿ふ

—昨日まで花の散るをぞ惜しみこし夢かうつつ
か夏も暮れにけり—

御苑

黒い土に
百日紅の花
蝉の白腹
西日が炙りて
夏がころがる

—我のみぞかなしとは思ふ浪のよる山のひたひ
に雪のふれれば—

雪あかり

雪あかり
深夜を歩く
白無垢の
京の家並みよ
無音に酔ふ

—うち忘れはかなくてのみ過ぐしきぬあはれと
思へ身につもる年—

新年

あらたまの
年のはじめに
身を正し
真のことばに
すがりつく

—夕月夜おぼつかなきを雲間よりほのかに見え
しそれかあらぬか—

夕月夜

千羽鶴

糸から放て
羽ばたいて
祈りを背に
空へと向かう

—奥山の岩垣沼に木の葉おちてしづめる心人し
るらめや—

斑蝶

厚い胸ぐら
瑠璃のはね
鳥も追うて
戦う斑蝶の
ここに潜む

—塔をくみ堂をつくるも人のなげき^{さんげ}懺悔にまさ
る^{くどく}功德やはある—

懺悔

吉祥天女の
おんまえに
額づき祈る
女ひとり
懺悔続きぬ

—ほのほのみ虚空にみてる阿鼻地獄ゆくへもな
しといふもはかなし—

最期

澄む蠟液

吸い納めて

燃え尽きる

黒い綿芯

光輝がつつむ

—大海の磯もとどろによする浪われてくだけで
裂けて散るかも—

女神

心の壺には
満ちる海が
天地をむすぶ
虹の女神が
迎えを遣（よこ）す

—紅のちしほのまふり山の端に日の入るときの
空にぞありける—

冬支度

藁灰を

黒々残し

冬支度

里山の

秋は麗しい

—かくてのみありてはかなき世の中を憂しとや
いはむあはれとやいはむ—

命綱

命綱なしに
よくぞ
ここまで
渡りたる
見返るを得ず

—いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子
の母をたづぬる—

家畜

懐こい目で
人に従い
身を供する
羊の優しさ
人をゆるせよ

一時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨
やめたまへ—

断層

大地割れ
波打つ地層
生物の
呻き閉じ得ず
襞の現る